

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：84603

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284027

研究課題名(和文) 高雄曼荼羅にみる古代アジア密教美術の様相

研究課題名(英文) Elements of Esoteric Buddhism from Ancient Asia in the Takao Mandala

研究代表者

松本 伸之 (Mtsumoto, Nobuyuki)

独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・その他部局等・館長

研究者番号：30229562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：京都・神護寺に伝来する両界曼荼羅(高雄曼荼羅)は空海が中国より請来した両界曼荼羅を写したものである。その身体表現は多分にインド的であるが、インドとの具体的関係は明らかになっていない。本研究では、高雄曼荼羅の表現の源流を探るために、古代インド絵画の数少ない遺品であるアジャンタ石窟、エローラ石窟、さらにインド絵画の表現を取り入れたスリランカのシギリヤ遺跡の調査を実施した。また、インド各地に残る仏像等の彫刻作品と高雄曼荼羅の身体表現を比較し、両者の共通性を探った。また、インドには遺品が残っていない密教法具について、彫刻が持つ法具を検討して、その源流がインドに求められるのか考察した。

研究成果の概要(英文)：The Takao Mandala, which is a Mandala of the Two Realms that has been passed down at Jingoji in Kyoto, is a copy after an original that was brought from China by Kukai. Although the figures in this work appear to show influence from Indian art, clear stylistic connections have yet to be established. This research, which aims to clarify the origin of the style of the Takao Mandala, consists of examinations of ancient Indian paintings in the Ajanta and Ellora caves, as well as images at Sigiriya in Sri Lanka that incorporate Indian forms of artistic expression. It also compares the figural expression seen in Buddhist sculptures in various regions of India with those of the Takao Mandala, examining connections between the two. Lastly, it attempts to answer the question of whether certain ritual implements for Esoteric Buddhism, namely implements actual examples of which no longer remain in India, may be traced back to India by examining depictions of ritual implements in Buddhist statuary.

研究分野：日本東洋美術

キーワード：高雄曼荼羅 両界曼荼羅 神護寺 インド古代美術

1. 研究開始当初の背景

京都・神護寺が所蔵する国宝・高雄曼荼羅は、紫綾地に金銀泥で描かれた大型の両界曼荼羅で、淳和天皇の御願により天長年間(824～33)に空海(774～835)が製作したものである。空海は唐・長安留学中に師の恵果より彩色の両界曼荼羅を授かり、これを請来した。この曼荼羅は密教を伝えるものとして重視されたが、劣化が激しく、弘仁12年(821)に最初の転写が行われ、その後も幾度か転写が行われた。高雄曼荼羅はそのうちの一つで、請来本を基に製作されており、請来本およびその第一転写である弘仁本が失われた現在においては、日本のみならず中国・インドを通覧しても最古の両界曼荼羅であり、非常に重要な遺例である。

このように重要な作品ながら、近年は研究の目立った進展はない。本研究グループは高雄曼荼羅の重要性に鑑み、科学研究費補助金の助成を受け、現在の技術を駆使した高精細の画像を新た撮影した(「光学的調査に基づく高雄曼荼羅の発展的研究」(課題番号26284027、平成23～25年度))。撮影は画面の隅々まで精度の高い画像が得られるように、カラー撮影は解像度8000万画素、赤外線撮影は解像度4000万画素の高性能デジタルカメラを使用した。その結果、絹目までもはっきりと確認できるカラー画像を取得でき、また赤外線画像では明瞭な銀泥線を確認できた。これをもとに復元的考察の端緒となすべく、赤外線画像から銀泥線を抽出し、当時の経巻見返絵から抽出した状態の良い銀色に置き換えた上で、カラー画像に合成する作業を実施し、全画面にわたって製作当時の様子を知ることが出来る画像を得ることが出来た。これらにより、高雄曼荼羅研究は今後、劇的に発展することは間違いない。

2. 研究の目的

本研究グループの光学的調査によって得られた画像の分析により、絵画技法や図像におけるいくつかの重要な検討課題を得た。例えば金銀泥混合画像により、銀の効果はこれまで考えられていたように控えめと言うよりむしろ、白い輝きが印象的であったと判明した。銀の代用として白を用いたと見られる敦煌出土の例なども踏まえ、銀の効果とその使用については再検討されるべきと考える。また表現上の検討課題としては、空海の曼荼羅請来以前とは明らかに異なる強調された身体表現について、インド的と称される源流が実際にはどこに求められるのか、仏像以外の装飾的な要素についてその起源がどこに求められるのかなどがある。

本研究では以上のような高雄曼荼羅にまつわる検討課題を起点とし、空海が入唐した当時の中国における造形的特徴および、造形技法について考察を深めるとともに、密教誕生の地であるインドへ遡り、中国におけるインド密教の造形的・技法的な受容の実態を明

確にする。そして、唐代における密教美術の様相を広く把握した上で、高雄曼荼羅へと考察を集約し、最終的に、高雄曼荼羅に凝縮された古代アジアの造形・技法とその意義を明らかにする事を目的とする。それらによって日本美術のみならず、古代アジア美術史全般の要となる高雄曼荼羅の位置付けを確認し、より多角的な評価を促すことができると考える。

3. 研究の方法

本研究では、高雄曼荼羅を古代アジアの密教美術の要と位置付けるが、そこに凝縮された造形・技法とその意義を明らかにするため、インドから中国を経て日本へ伝えられた密教流伝のルートにおいて制作された密教美術の遺例を広く調査する。本研究における各分野の主要テーマは、絵画は金銀泥絵の技法・用法と装飾表現、彫刻は高雄曼荼羅の身体表現、工芸は密教法具についてであり、以上のテーマに基づき、流伝ルートの周辺で密教美術が残されている遺跡や石窟などの調査を実施する。

絵画の研究テーマは、高雄曼荼羅の金銀泥表現に関わる問題である。空海の請来した彩色の両界曼荼羅に対し、高雄曼荼羅は金銀泥で綾地に描かれるが、この変更の目的や意図は知られていない。師から授かった由緒ある画像に変更を加えるという行為には、何らかの意図があってしかるべきである。この解明には、空海が入唐した当時の中国および、高雄曼荼羅の成立当初の日本における絵画制作を取り巻く環境を正確に把握する必要がある。

高雄曼荼羅にみられる身体表現は、空海が造営に関わった東寺の菩薩像や留学中に空海もみた可能性がある西安・大安国寺跡出土の密教仏(碑林博物館蔵)の筋肉質な身体表現に通じるところがある。それらはインド的と考えられているが、源流が実際にはどこに求められるのか、中国・インドの仏像に見られる造形を広く調査した上で考察する。

工芸分野は、インド・中国仏像の武器(密教法具)の集成と体系化を試みる。密教法具はインドの武器からその形を取ったと言われるが、武器・法具ともインドにおいて遺例は確認されていない。また中国にも8世紀にさかのぼる密教法具はなく、日本の東寺に伝来したものが最古である。

密教法具の祖形が武器であったという説は、インドの彫像が持物としていることを根拠とするが、インドの武器を体系的に調べた研究はない。そのためインド・中国の彫像にみられる武器(密教法具)の資料を収集し、その形式的特徴から系統立てて整理することによって、密教法具と武器との関連の妥当性を確認する。その上で高雄曼荼羅における密教法具の表現について考察する。

4. 研究成果

平成 26 年度

インド古代絵画の希少な遺品であるアジャンタ石窟、エローラ石窟のほか、アウランガバード石窟群、エレファンタ島遺跡で調査を実施した。アジャンタ石窟には紀元前 2 世紀 - 7 世紀、エローラ石窟には 9 世紀 - 10 世紀の絵画が残されているが、十分な画像が公開されていない。今回の調査では壁画が残る窟を中心に、細部の表現まで確認することが出来る高精細な画像を撮影した。また、東京国立博物館で開催の特別展「インドの仏」出陳作品についても調査を実施した。

本研究は科学研究費「光学的調査に基づく高雄曼荼羅の発展的研究」(研究代表者：松本伸之、平成 23-25 年度)をさらに発展させようとするものであるが、その研究で撮影した高雄曼荼羅の高精細画像の整理と画像による作品研究を、本研究期間を通しておこなった。

研究成果の国民への発信として、東京国立博物館の月例講演会において高雄曼荼羅をテーマとした講演会をおこなった。

平成 27 年度

京都・東寺講堂の密教諸像の調査を実施した。東寺講堂の密教諸像は、本研究の主題である高雄曼荼羅を日本に請来した空海が建立したもので、密教の世界観を表現する立体曼荼羅で、空海独自の思想も表現されている。高雄曼荼羅に描かれる諸像との図像的關係はもとより、身体表現にも共通する要素が見られる重要な作品群である。諸像は須弥壇上にあつて通常は限られた視点からしか見ることが出来ないが、壇上で詳細に観察することができ、写真資料の作成も行った。

また、空海の孫弟子に当たる聖宝が貞観 16 年(874 年)に創建した醍醐寺には多くの密教関係の絵画、彫刻、工芸、書跡が残されている。空海が紹介した密教美術がどのように受け入れられたかを知る上で重要な作品である。それらについて調査を実施し写真等の資料を作成した。

高雄曼荼羅の図像的、表現的な源流があると考えられるインドでの調査も実施した。調査対象は、ブッダガヤ考古学博物館、ナーランダ考古博物館、パトナ考古学博物館、デリーの国立博物館、マトゥラー博物館である。ナーランダは密教の中心地でもあった場所で、ナーランダ大学の旧跡でも調査を行った。

平成 28 年度

韓国・国立中央博物館所蔵の西域絵画、中国・陝西歴史博物館所蔵の絵画、碑林博物館の彫刻作品調査を実施した。それらの絵画作品は、高雄曼荼羅の原本が描かれた時代の作品であり、高雄曼荼羅を考察するうえで重要な作品で、身体表現を中心テーマに実施し、高雄曼荼羅の身体表現の源流について考察する資料を得た。碑林博物館では、空海入唐よりも少し早い時期に造られた密教尊像の

調査を実施し、高雄曼荼羅の身体表現との比較検討を行った。

インドに地理的に近いスリランカにおける密教美術の調査を実施した。密教では独特の法具が用いられるが、密教が生まれたインドには残っていない。スリランカにはわずかに残っていて、それらの調査を実施した。その中で、日本では紹介されていない五鈷杵を見出すことができた。

前年度に引き続き、京都・醍醐寺の密教美術の調査を実施した。空海没後の密教美術の変容を考察する資料などを作成した。

平成 29 年度

9 世紀末に創建され、真言密教の重要な拠点となった京都・仁和寺に伝わる密教美術の調査を実施した。仁和寺は密教の実践(事相)の寺として知られ、図像類が多く伝わり、それらの調査を行った。空海が中国留学時に書き留めた経典等が含まれる三十帖冊子の全項の写真撮影を行い、研究資料の充実を図った。

インドのアジャンタ石窟、エローラ石窟の調査を行った。両遺跡調査は 26 年度にも実施したもので、古代絵画が残る重要なもので、高雄曼荼羅の表現の源流についての検討をさらに進めるための資料作成をした。インドでは、ほかにサンチー遺跡、ウダイギリ、ヴィディーシャ考古学博物館、ポーパル州立博物館、カンヘリー石窟の調査を実施した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 18 件)

松本伸之、「博物館における企画展・特別展の企画等について」、『展示論講座』日本展示学会、2014 年、査読無

松本伸之、「京都の新たな '顔' を目指して」、『新美術新聞』p.1、2014 年、査読無

小泉恵英、「新出の携帯用龕像について」、『ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究』平成 20-24 年度科学研究費補助金(基盤研究 A)研究成果報告書(研究代表者 宮治昭)、pp.329-343、査読無

和田浩(1 番目)他 3 名、「次世代型展示用照明器具の評価法に関する研究」、『文化財保存修復学会第 36 回大会研究発表要旨集』、pp.306-307、2014 年、査読無

丸山士郎、「広島・南宮神社神像群と神像の物語性」、『MUSEUM』652、pp.7-36、2014 年、査読有

松本伸之、「展覧会を作る - 国立博物館における企画展・特別展の企画等について」、『展示論講座』日本展示学会、2015 年、査読無

丸山士郎、「みちのくの仏像と東北における仏像表現の受容」、『みちのくの仏像』東京国立博物館等編、pp.16-21、2015 年、査読

無

和田浩、松嶋雅人、矢野賀一、土屋貴裕、
「OLED 光源を用いた面発光照明器具による
伝統的な屋内光環境効果の復元」、『展示学』
52 号、pp.22-27、2015 年、査読有

小泉惠英、「パールフット インド古代仏
教美術のあけぼの」、『コルカタ・インド博物
館所蔵 インドの仏 教美術の源流』日本経
済新聞社、pp.167-175、2015 年、査読無

伊藤信二、線刻千手観音鏡像、國華、1444
号 pp.40 45、2016 年、査読無

丸山土郎、「滋賀・櫛野寺のみほとけと仏
師」、『平安の秘仏』、東京国立博物館等編、
pp. 14 19、2016 年、査読無

丸山土郎、「醍醐寺的美術」、『醍醐寺芸術
珍宝』上海博物館・陝西歴史博物館編、pp.17
21、2016 年、査読無

小泉惠英、「黄金のアフガニスタン-輝かし
い歴史と未来」、『黄金のアフガニスタン 守
りぬかれたシルクロードの秘宝』産経新聞社、
pp.14-19、2016 年、査読無

Hisashi Abe、Ken Watanabe、Atsuko
Ishikawa、Shuichi Noshiro、Tomoyuki
Fujii、Mitsuharu Iwasa、Hiroaki Kaneko、
Hiroshi Wada、「Simple separation of
Torreya nucifera and Chamaecyparis obtuse
wood using portable visible and
near-infrared

spectrophotometry:differences in
lightconducting properties」、『journal of
wood science』、pp.1-3、2016、査読有

丸山土郎、「真如苑所蔵 大日如来坐像の X
線断層写真(CT)調査報告」、『MUSEUM』、668、
pp.45 66、2017 年、査読有

小泉惠英、「ガンダーラにおける仏陀不表
現の図像」、『宮治昭編 『アジア仏教美術論集』
所収、pp.109-136、中央公論美術出版、査読
無

小泉惠英、「ワット・スタットの扉」、『タ
イ国情報』第 51 巻第 4 号 pp. 8-13、査読無
Hiroshi Wada, Katsuhiko Saito, "Study on
transport environment of cultural
properties via ship in Japan", Proceedings
of the 28th IAPRI World Symposium on
Packaging, Lausanne pp.163-167、2017 年、
査読無

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 伸之 (MATSUMOTO, Nobuyuki)
独立行政法人国立文化財機構奈良国立博
物館・館長
研究者番号：30229562

(2) 研究分担者

丸山 土郎 (MARUYAMA, Shiro)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博
物館・学芸企画部企画課特別展室・室長
研究者番号：20249915

小泉 惠英 (KOIZUMI, Yoshihide)
独立行政法人国立文化財機構九州国立博
物館・学芸部・部長
研究者番号：40205315

伊藤 信二 (ITO, Shinji)
独立行政法人国立文化財機構九州国立博
物館・学芸部企画室・室長
研究者番号：00443622

沖松 健次郎 (OKUMATSU, Kenjiro)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博
物館・学芸研究部調査研究科絵画彫刻室・
室長
研究者番号：30332133

和田 浩 (WADA, Hiroshi)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博
物館・学芸研究部保存修復課環境保存室・
室長
研究者番号：60332136

塚本 磨充 (TSUKAMOTO, Maromitsu)
東京大学・東洋文化研究所・准教授
研究者番号：00416265

安藤 香織 (ANDO, Kaori)
公益財団法人徳川黎明会徳川美術館企画

推進部・学芸員
研究者番号：20555031

(3)連携研究者
()

研究者番号：

(4)研究協力者
()